

令和 4 年 5 月 18 日現在

機関番号：24301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13007

研究課題名（和文）戦後日本の美術史形成過程研究序論：1960年代、国際的同時性の文脈と「日本」性

研究課題名（英文）A Study on Making of Art History in Postwar Japan: With a Focus on the Context of International Contemporaneity and the Nature of Japan in the 1960s

研究代表者

山下 晃平 (Yamashita, Kohei)

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・非常勤講師

研究者番号：50792131

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1960年代に日本の美術界に頻出した美術言説「国際的同時性」の文脈と同時代に国内外で高く評価された作家・前田常作の批評を比較・分析した。その際、日本文化論も援用した。結果として、「国際的同時性」の文脈には、「国際性」に対する価値基準の偏向の問題と、一方で画壇から個へという国内制度の問題とが重層的に関わっていることを捉えた。そのような日本美術の「国際性」は、メインストリームの価値基準だけへの「収束し難さ」を伴っており「逸脱」を伴う。この価値基準の多層性を「国際的同時性」における日本的性質と捉え、戦後日本の美術史形成過程に関わる日本の「国際性」の性質を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、これまでの日本の前衛史では見過ごされていた、1960年前後の日本の抽象絵画が果たした役割を明らかにした点にある。日本における真の「国際的同時性」は、1960年代の「反芸術」世代の一つ前の世代にすでに発端があり、前田常作はその重要な位置付けにある作家とみなすことができる。

またこのように美術言説「国際的同時性」の発端を、前田常作やオノサト・トシノブら1960年前後の抽象絵画の表現論にまで遡らせることによって、日本美術界の構造を押さえた国際的に発信し得る日本の「展覧会史」を形成することが可能となる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the context of “international contemporaneity,” as observed in art discourses in Japan during the 1960s. Simultaneously, I took notice of articles on Maeda Josaku by main art critics of that time as well. For analyzing materials mentioned above, I referred to the fundamental structure of Japanese culture. The analysis revealed that the context of “international contemporaneity” is multilayered and involves the problem of the bias for “internationality,” and on the other hand, one of the domestic institutions, the shift from art circles to individuals. The “internationality” in Japanese art involves “the difficulty of converging” toward only the mainstream criterion of value, and besides, the nature of “deviation” from it. This multilayered nature, involving this “deviation,” is just defined as Japan-ness of “international contemporaneity” in Japan.

研究分野：近現代美術史、表象文化論

キーワード：前田常作 国際的同時性 戦後日本美術 日本文化論 オノサト・トシノブ 国際性 民族性 日本性

1. 研究開始当初の背景

戦後 70 年を経て、日本の戦後美術に対する再評価の機運が高まっている。戦後のいわゆる「前衛」とされたグループの軌跡を検証する展覧会が増えているだけでなく、作品と美術批評の双方から日本の戦後美術を検証する動きがある。ただし従来の研究は、若手作家による前衛グループの活動が目目され、それらを主として欧米の美術動向から比較・分析する傾向が強い。しかしながら戦後日本の美術史研究には、その前提条件である国内の芸術環境そのものの構造を検証することが欠かせない。戦後日本の美術史がどのような時代意識や批評そのものの価値基準によって形成されてきたのか、その形成過程を研究することが、今後の戦後美術史研究には必須であり、本研究に着手した。

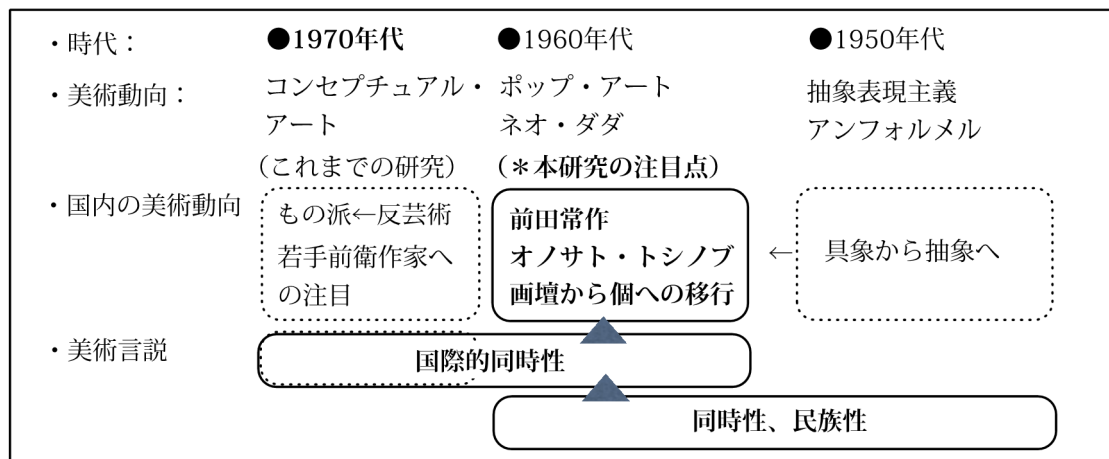
2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後日本の美術史形成過程を明らかにするために、1960 年代に国内外で高く評価された作家・前田常作とオノサト・トシノブに対する批評を手掛かりに、同時代の美術言説「国際的同時性」の文脈を検証することで、戦後日本における美術界総体としての志向性、即ち批評そのものの価値基準やバイアスを明らかにすることである。

前田常作とオノサト・トシノブは、戦後の大型美術展である「日本国際美術展」に 1960 年代で受賞し、さらに「現代日本美術展」にも継続的に招待された。具象から抽象へと向かう美術動向にあって、国際的な抽象様式を提示しつつも、一方で日本的あるいは東洋的としても議論され、国内外で注目された。1960 年代は、この二作家の受賞に重なりつつ、いわゆる「反芸術」と呼ばれた次世代の若い前衛作家が各大型美術展でも選抜あるいは受賞するようになる。この 1960 年代の移行期において頻出する美術言説が「国際的同時性」であり、当時の言説に拠れば、海外様式の受容ではなく、表現の革新を意識共有し、同じ基盤の上で創造に対する新たな情報を相互発信しようという問題意識として捉えられる。

最終的には、日本の特殊構造と呼ばれる「画壇から個へ」、そしてモダニズムからコンテンポラリー（現代美術）への移行期における戦後日本美術界の内実、すなわち「国際的同時性」に潜む西洋近代の制度受容の問題、また一方で「日本的なもの」つまり「日本」性への志向という文化的構造を明らかにする。

図表（研究対象の位置づけ）



3. 研究の方法

本研究は、当時の美術言説を抽出、緻密に分析することで、作家・美術評論家・ジャーナリズムによって形成される時代意識（志向性）を検証する言説史の手法を採用する。そのために次の 4 つの研究方法を取る。

(1) 美術言説「国際的同時性」の抽出と分析

1960 年代に頻出する「国際的同時性」に関連する言説資料を、美術雑誌（芸術新潮、美術手帖、みずゑ、三彩等）より抽出し、各言説の評価あるいは批評そのものの価値基準を分析する。また関連する 1950 年代の「民族性」、1960 年代の「同時性」についても調査する。膨大で地道な作業となるが、時代を限定することで作業の質を高める。

(2) 対象作家の批評研究

同様に、作家の前田常作、オノサト・トシノブに関する美術言説についても抽出、分析する。その際、「日本国際美術展」や「現代日本美術展」など受賞した美術展における批評の価値基準に

についても調査し、比較する。注目すべき海外での展覧会評についても調査する。

(3) 視覚資料の作成

分析作業に並行して、これまでの申請者の研究で作成済みの戦後日本の大型美術展に関する変遷表に、「国際的同時性」及び前田常作、オノサト・トシノブに関する美術言説、そして対象として挙げられた展覧会を追加し、視覚資料としての年表を作成する。これによって、展覧会の変遷と美術言説の推移を相関的に把握することができる。

(4) 対象作家の作品調査

前田常作、オノサト・トシノブの1960年代を中心した作品の確認、言説との比較調査を所蔵美術館等に赴いて実施する。

このように、前田常作とオノサト・トシノブに対する批評とその価値基準を手掛かりに、1960年代の美術言説「国際的同時性」の文脈を解明することで、日本美術界総体としての遷移や文化的構造を捉える。本研究の成果は、申請者が所属する学会で単独での口頭発表を行い、論文を投稿する。

4. 研究成果

上記の方法論に基づき、1960年前後の「前田常作」論を抽出し、さらに同時代の「国際性」に関する美術評論家の志向性を検証した。(オノサト・トシノブは比較資料とした。)結果として、本研究の成果は、以下の3点となる。

(1) 日本における「国際性」の性質を分析

1950年代の「国際性」「民族性」から1960年代末の「国際的同時性」へと至る美術批評を抽出・分析し、かつ主要な美術評論家による1960年前後の「前田常作」論の批評の価値基準を分析した結果、戦後日本の美術において真に「国際的同時性」な状況は、前田常作やオノサト・トシノブら1960年前後の抽象絵画にまで遡るものとして捉えられる。(前田常作作品の特徴については(2)に記載。)前田常作の作品が有する同時性と普遍性を踏まえると、日本における「国際性」の性質には、時代のメインストリーム(共通基盤)を共有するだけではない、「逸脱性」を伴うものとして捉えられる。すなわち、国際性という共通基盤における「表現」上の民族的性質ではない、逸脱を伴うもう一つの「表現論」が並走するという。これこそが日本における国際性の性質として捉えられる。

(2) 戦後日本美術史における前田常作の再定位

上記の理論に拠れば、前田常作の作品は、1960年前後の地平において、既に「国際的な同時性」を獲得しており、かつ芸術作品としての普遍性を有している。国際交流再開の時代と画壇から個への移行期にあって、前田常作はまさに「国際的な同時代性」とは何か、その本質を明確に体現していた作家として評価することができる。同時代の不定形性やメディウムの重層性を踏まえた抽象に依拠しない、矩形の連なりや色数を抑えた線描的な図像表現、そして日本画の素材や仕様の活用という前田常作の表現方法は、「絵画」のポストモダンの状況としても捉えられる。

(3) 国際的に発信し得る日本の展覧会史の形成

これまでの戦後日本美術史研究では、1950年代の具体美術協会や実験工房、1960年代の「反芸術」、そして1970年代の「もの派」という前衛史が形成され、その中で日本の国際性と独自性に関する議論や研究が行われてきた。しかしながら本研究が捉えたように、国内の前衛の動きを海外の美術動向と比較するだけでなく、まずは画壇形成や作家と美術評論家との関係性という「国内事情」を押さえることが重要である。(1)で示したように、日本の「国際性」を複層的なものとして捉えることで、海外の美術史への偏向が生じない国際的に発信し得る日本の展覧会史を形成することができる。

以上の3点より、本研究は、戦後日本の美術史形成過程を解明するための要点、各時代におけるメインストリームからの「逸脱」を孕む日本における「国際性」の性質を明らかにしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山下晃平	4. 巻 66
2. 論文標題 戦後日本の抽象絵画と「国際性」--1960年代の「前田常作」論を手がかりに--	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 89-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山下晃平	4. 巻 -
2. 論文標題 The Intention of the Art World and the Context of 'International Contemporaneity' in 1960s Japan: Referencing Changes in Large-scale Art Exhibitions in Japan After WW	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Proceedings of ICA2019 Belgrade -21st International Congress of Aesthetics (CD)	6. 最初と最後の頁 778-784
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 山下晃平
2. 発表標題 「国際的同時性」をめぐる美術言説の文脈と「日本」性--1960年代の「前田常作」論を手がかりに--
3. 学会等名 表象文化論学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山下晃平
2. 発表標題 The Intention of the Art World and the Context of 'International Contemporaneity' in 1960s Japan: Referencing Changes in Large-scale Art Exhibitions in Japan After WW
3. 学会等名 ICA2019 Belgrade -21st International Congress of Aesthetics, Belgrade（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ
<http://www.oralarthistory.org>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------